表象文化論研究 6　東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学表象文化論　2008 年 3 月　pp. 2-16

天内 大樹[1]

様式と国民の興亡

伊東忠太による「日本建築史」

1. 伊東忠太

日本の建築史のパイオニアとされる[2]伊東忠太（1867-1954）が 1892 年に書いた帝国大学工科大学建築学科卒業論文『建築哲学』では、精神的な産物としての建築を主張するべく「派流」つまり様式の興廃の原理的かつ一般的な記述が試みられた[3]。ついで 1893 年の論文のタイトル『法隆寺建築論』には、単に法隆寺の建築について扱ったという以上に、法隆寺が古物や工芸品を収納する「器械」ではなく、精神的な背景の下で様式を備えた“建築である”という主張が込められた。むろん時代背景として、奈良や京都に散在する仏寺が近代化運動と排仏毀釈運動の只中で半ば打ち捨てられたようになっていた点は確認すべきだが、伊東の仕事には、むしろ日本建築史という学問の枠組みが成り立つ上での基礎を、西洋への参照の下で作ろうという意図を看取るべきだろう。西洋語「アーキテクチュール」の訳語を「造家学」から「建築術」に改めるよう主張した[4]のも、生産に与する学問としてより、哲

---

[1] 本文中の引用はすべて天内が現代の表記に適宜直した。

[2] 日本の建築史学における伊東の位置付けの「両義的な性質」については、青井哲人（2001）「法隆寺と世界建築史――伊東忠太「法隆寺建築論」の二重性とその帰趨」、科学研究費研究報告書（研究代表者：米倉迪夫）『日本における美術史学の成立と展開』、16。

[3] 丸山茂（1996）『日本の建築と思想――伊東忠太小論』同文書院。

[4] 伊東忠太（1894）「「アーキテクチュール」の本義を論じてその訳字を撰定し我か造家学会の改名を望む」『建築雑誌』no.90, 195-6。実際にはまるで伊東提案の「建築〈術〉」とそれまでの「造家〈学〉」との中間をとるかのように、「建築学」という訳語が発明され、現在に至っているのは周知の通りだろう。

学から法規、実践上の手法に到る横断的な知の営みとして建築を構想したからであり、西洋の学問体系を日本に移入する際の態度の一端を示していると考えられる。

1897年に東京帝国大学講師に就いた伊東は、教授就任が間近だった1903年から、教授就任に欧米への3年間の留学を求めるという当時の帝国大学の慣習を曲げて[5]、清国、ビルマ、インド、トルコを少人数で旅行し、欧米を通過して1905年に帰国する旅行を遂げた。この旅行の目的は、先の『法隆寺建築論』で挙げられた、法隆寺回廊の柱とギリシア神殿の柱に見られるエンタシスの類似や、法隆寺建造物の立面ないしファサードに見られる比例関係をギリシア神殿と重ねるなど、日本の建物と西洋建築史とくにギリシアとの、想像上にとどまる関係を様式的ないし形態的側面から実証することだった。中国山西省・雲崗遺跡発見というポジティヴな成果も、伊東は一旦はヘレニズム文化が伝播したガンダーラの様式と法隆寺を繋ぐいわば「ミッシング・リンク」と考えたが、結局この実証は成し遂げられなかった。帰国の3年後、1908年11月30日に伊東は「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」と題する3時間の講演を行ったが、同講演にはユーラシア大陸各地の建築を実見し、その後も二度中国大陸を訪れた伊東の経験が凝縮された、とひとまずは言える。

本稿は、伊東が自らの歴史観を存分に展開したと考えられる同講演の内容を「様式／スタイル」への言及から検討する。その際補助線として、まだ大学院生だった当時から伊東に東京美術学校で講義させていた、当時の美術学校校長・岡倉天心（1863-1913）の議論を適宜用いる。

2.「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」

2.1. 世界建築史との接続による日本建築史の基礎付け

緒言では世界的な視野での「歴史」と日本の現況を結びつける意図が見える。

> […] 今日の我邦の建築界の状態は随分混沌たるものでありまして、ほとんど無政府のような有様でございます、明治以前の純粋の建築の形式

[5] 岸田日出刀（1945）『建築学者伊東忠太』乾元社、138-140。

がここに終結を告げて今や新しいスタイルがそれに代って興ろうとしてまだ興らない、いわゆる過渡の時代すなわち暗黒時代の常態とは言いながらその統一のない有様はずいぶん甚だしいものでありまして、おそらく世界歴史始まってから今日のような場合はまずたくさんにあるまいと思われます[6]

明治以前の日本に「建築」が「純粋」な「形式」として存在したことが前提されたが、しかしその純粋さはすでに「終結」した。一方それに代わる様式がいまだ統一されないという現況を、彼は世界の視点から評価した。なおこの時点で伊東は建築様式の「統一」を肯定的に述べ、目指すべき状態としているようだが、本講演の約3年後には「一つのスタイルに統一されるということは［…］できないことと思い、またできるのを望みもしない」[7]としながらも、本稿で後述するような国民の「趣味」を本位とした「進化主義」の態度は崩していない。少なくともこの時点では、彼の「進化主義」の中で“優勝劣敗”や“適者生存”といった要素がさほど重要ではなかったことを窺わせる。この「進化論」との関わりについての検討は次節で、日本の建築様式の固有性という主張との関わりについては2.4節で行う。

2.2.「建築進化の原則」

伊東はこの論文でまず7箇条に亘る「建築進化の原則」を挙げた。

第一　建築は材料（肉体）と意匠（精神）とより成る
第二　材料は意匠を助成し、意匠は材料を改善し、相輔けて進化す
第三　建築意匠を司る最大勢力は宗教なり
第四　スタイルはスタイルを生ず、スタイルは故なくして発生または死滅せず
第五　左の場合にはスタイルの変化を生ず
　（甲）材料変化するとき

---

[6] 伊東忠太（1909）「建築進化の法則より見たる我邦建築の前途」『建築雑誌』no.265、1909.1, 4-36。ただし引用は『建築世界』1910.2, 11より。当時同一原稿が各媒体で再録されており、誤植等を除けばテクスト上の異同はない。

[7] 伊東忠太（1912）「黒人的混沌時代――我が国建築様式の過去現在及び未来――」『建築と装飾』v.2, n.1, 1-2。なお表題の「黒人」は「素人」と対置された語である。

（乙）意匠変化するとき
（丙）強制的もしくは任意的に外部の影響を受くるとき
第六　スタイルの変化は左の形式において現わる
（甲）器械的混合
（乙）化学的融合
第七　スタイルの変化は突如に成ることなしもし材料の変更による場合にはその間にいわゆる Succedaneum すなわち Substitution の時代を生ず[8]

直ちに注釈しておかねばならないのは、ここでは意匠という語が、造られた建物にではなく造る人間の側の精神的な働きに属している点である。この語法は岡倉天心がたとえば「日本美術の変遷」について次のように述べた際のそれと一致しており、岡倉から伊東へという影響関係が窺われる。岡倉は意匠ないし精神を、形姿ないし形式と対立させた。

［…］精神鋭くして観念先立つときは興起し、これに反してひたすら形式を求むるに至れば必ず衰退す。
美術成立の要素たる、意匠・形姿の二つあるが如し。古来各時代隆替の跡を討ぬるに、何れも先ず精神を主とし、これに満足すれば形姿の美醜を逐うは必ず同一轍に出づ[9]。

この講演は「原則」として伊東の立場を端的に示すものとして、後世の建築史学でも伊東忠太の「建築進化論」という名の下に広く知られてきた[10]が、しかしタイトルにもなっている「進化」という語を過剰に重視すべきではないだろう。建築史家の稲垣栄三がこの語法にハーバート・スペンサーの影響を挙げて[11]以来、この講演が社会進化論の当時の隆盛の一端を示したという

---

[8] 伊東（1909）11-13 から適宜抜粋。
[9] 岡倉天心（1944）「日本美術史」、『岡倉天心全集』創元社、v.6, 321［1890-2 年の講義を口述筆記したもの］。伊東についてのこの点の指摘は倉方俊輔（2004）「「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」の趣旨について――伊東忠太「建築進化論」の特質に関する研究その 1 ――」、『日本建築学会計画系論文集』no.581, 2004.7, 191-5。
[10] 藤森照信（1993）『日本の近代建築（下）――大正・昭和篇――』岩波新書、11-23 では伊東の「建築進化論」を「創作論」と位置づけ、「進化主義」の実践が同時代の課題となったと記述している。
[11] 稲垣栄三（1970）『日本の近代建築――その成立過程（上）』鹿島出版会、174。

考えが、村松伸[12]にも引き継がれる有力な説だった。しかし近年川道麟太郎、橋寺知子は社会進化論の影響を確認できないと判断し、これに代えて、進化という語の時代的な流行、辰野金吾の1894年の講演「建築の進化」、岡倉天心の日本美術史観、伊東自身の卒業論文『建築哲学』での研究動機、B・F・フレッチャーの論文の翻訳「建築における材料の勢力」を始めとする同時代西洋の論考群という五つもの要因を挙げた[13]。その一方で倉方俊輔はこの前後の伊東の論考群を改めて「建築進化論」と総称し[14]、「「生物」の語が喚起するイメージは［…］欠くことができない」と強調さえする。

しかし伊東の講演には「便宜上建築というものを人生――人生というよりは一般の生物に喩えて解説してみたいと考えます」と、一旦述べた「人生」という語を「生物」と言い直した箇所[15]がある。その他に「生物」という語は一箇所しか使われない。またこの原則の第一で伊東は建築の「材料と意匠」を「人間の肉体と精神」に喩え、第二でも「肉体の競争は精神を強壮ならしめ、精神の強健は肉体の健強を助成する」と人に喩えた。第五条の甲乙丙おのおのを「体質の変化する場合で例えば少年から壮年に移るとき」「精神上の変動で例えば何か非常な激烈な感情を発作したとき」「人の偉大なる聖賢英雄などの感化を受けるようなもの」などとし、第七でも「人間の思想の変ずるときにも必ずその間に多少の煩悶があるようなもの」と述べた。すでに中村正直や加藤弘之の「適者生存」から数十年経っていた[16]ことも含め以上を考慮すると、少なくともこの時点で伊東の「進化」という語法は「人生」の経過にも置き換え可能な、比較的雑駁な隠喩にすぎないといえる[17]。よって生物のイメージが「原則」に全面的に関与したとは言えない。

とはいえ「生物」の比喩が使われたもう一つの箇所では比喩が成功してい

---

[12] 村松伸（1993）「従軍建築史家たちの夢」『現代思想』青土社 v.21-07, 1993.7, 181。

[13] 川道麟太郎、橋寺知子（1999）「伊東忠太の「建築進化論について（上）その由来」『日本建築学会計画系論文集』no.525, 1999.11, 281-285。

[14] 倉方（2005）「「建築進化論」と設計活動との関係について――伊東忠太「建築進化論」の特質に関する研究その2 ――」、『日本建築学会計画系論集』no.589, 2005.3, 193-9、とくに193-4。

[15] 伊東（1909）11。

[16] 中村正直『西国立志編』は1871年、加藤弘之『人権新説』は1882年の書物である。

[17] ただし伊東は1922年時点では「適者生存」というテーゼを掲げ、現代に言う「進化論的な」思考を示した。伊東（1922）「日本建築界発達の趨勢とその将来観」、朝鮮建築会『朝鮮と建築』no.4, 1922.9, 8-9。また1920年時点での論考に進化論的な思考を見出すことも可能であろう。伊東（1920）「余の建築様式観について」『建築世界』v.14, n.7,

る点は見落とせない。第四条について伊東は「一旦建築のスタイルが成り立ちまするとそのスタイルから次のスタイルが生まれ順々に生物が殖えるように殖えます［…］突然新スタイルが発生することもなければまた突然に無くなることもない」[18]と述べた。主張ないし議論の動機と表題が一致したこの第四条、「様式が連続的に変化する」ことこそ、「原則」の要点だったと言える。ただしこの点も岡倉が特に日本美術について「系統を逐うて進化し、系統を離れて滅ぶ。／美術は孤立のものに非ず」と述べた[19]点に一致する。

以上の読みをふまえて伊東の主張をまとめると次のようになる。建築の二大構成要素である「材料」とそれを「形姿」に到らしめる人間の「意匠」とは（第一）、相互作用を通じ建築の「進化」の動因となるが（第二）、従来その「意匠」には宗教が大きく関与した（第三）。いずれにせよ様式は連続的に変化せざるをえず、スタイルが急に発生したり消滅したりすることはない（第四）。「材料」と「意匠」の内的な展開がある一方で外部の（おそらくは「意匠」に対する）影響による変化もある（第五）。そのような変化は、「器械的に混合し［…］明らかに元の二つ以上のスタイルに分かつことができる」場合（第六・甲）と「元のスタイルがもはや肉眼では見えない」ほど甲乙の「スタイル」から「全く異なりたる丙のスタイルができた場合」（第六・乙）として観察される。そして材料の急激な変化に対し精神の変化は遅れるため、たとえ材料の変化が起因であっても（ましてや精神の変化が起因であればなおのこと）、全体としてスタイルの変化には過渡期が伴うはずだ（第七）――となる。

2.3.「材料」と「意匠」の「進化」

以上の伊東の「原則」は第一条に基づき「材料」と「意匠」の二面から敷衍された。

「材料」について伊東はユーラシア大陸各地の建築を実例としてふんだん

1920.7, 5-7。なお鈴木貞美、永井隆則らが、大正期へむけて「生命」「人格」「個性」などの語を称揚する傾向があったことを指摘しているが、伊東の「人生」はこれと本質的なつながりがあるとも考えにくい。鈴木貞美（1996）『「生命」で読む日本近代』NHK ブックス、永井隆則（1999）「1930 年代日本のセザンヌ受容――「人格」から「造型」へ――」美学会編『美学・芸術学の今日的課題』17-19。

[18] 伊東（1909）『建築世界』12。

[19] 岡倉（1944）321。

に取り上げて「凡ての材料はみな一斉に石材に帰してしまう」と結論づける。そのため「材料の進化の順序」として、「原始時代」（泥、石、植物、天幕を使用する「諸種の蛮民」）「木材時代」（日本、ヒマラヤ、スカンジナヴィア、アルプス山中）「木石混合時代」（中国）「石材時代」（欧米諸国）「鉄材時代」（北米で興りつつあるが未成立）という五つが挙げられた。とはいえこれは進化の階梯を示すものではない。「泥あるいは土」「石」「木材及びその他の植物」で作られていた各地の建築はみな石材建築に「進化」するという原則に対し、「今日まで石材に進化しないでいるところの世界唯一の除外例」であった日本は、第二期「木材時代」から第三期ないし第五期に「一躍して破格の進行を試み」ているとされたからである。さらに伊東はここで「進化」という語から直ちに想像されるだろう優劣の差をも認めない。「第二期にあるから劣等であるとか第五期にあるから上等であるとかいうことはない、材料の問題と意匠の問題と混同してはならないのです」。

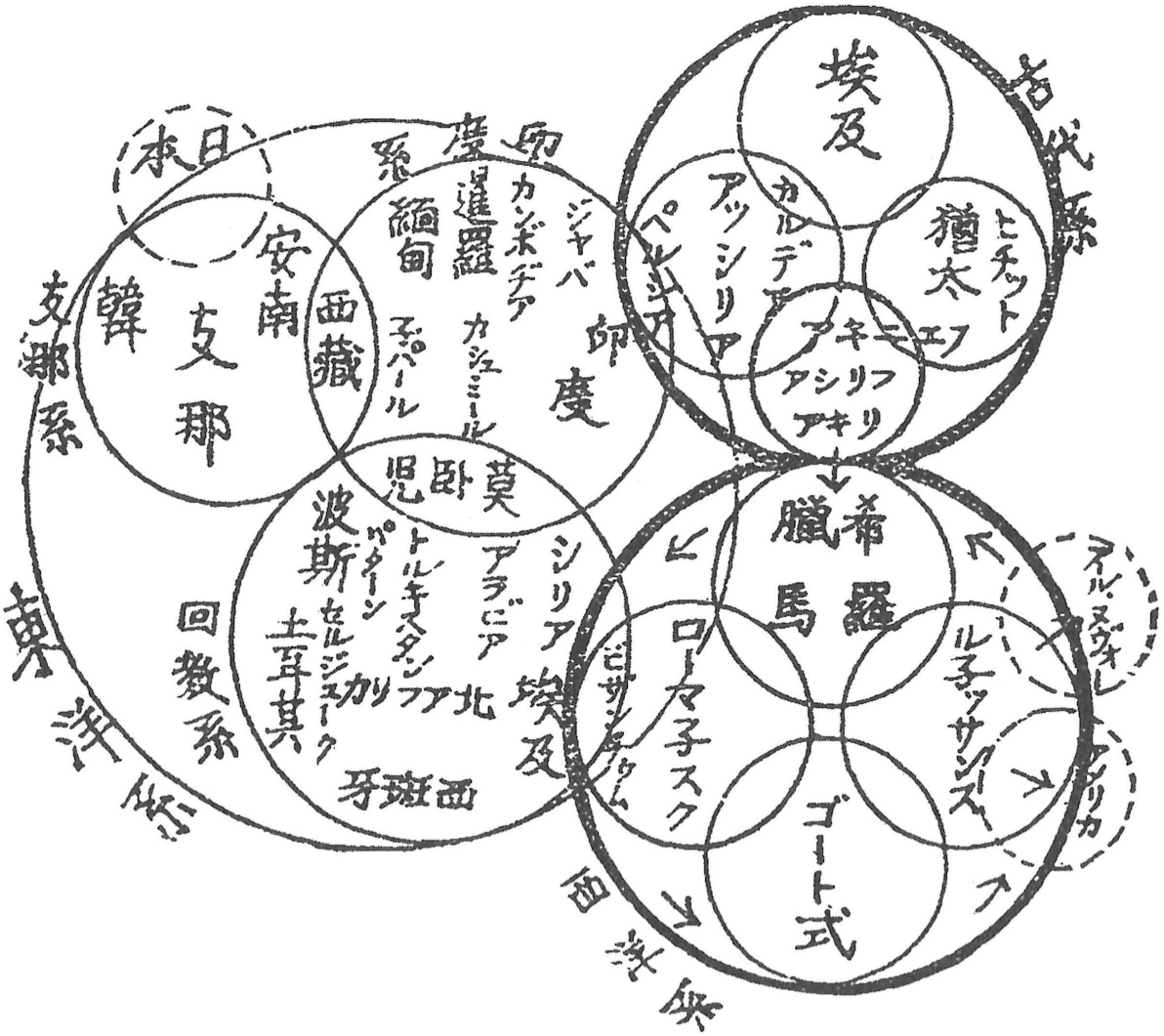
しかしこの「一躍」には当然、原則の第七で言われたように過渡期が認められるはずである。この点で伊東の挙げた例の中で注目されるのは、泥や木材から由来する建築の部分が、石材になっても引き継がれ、装飾として残ることが繰り返し語られている点である。例えばエジプト建築がもし泥の壁から進化したものとすれば、泥壁に施されていた陰刻の手法が長く伝えられた結果後世のエジプト建築ができたといえ、またもし天幕の建物から進化したものとすれば、天幕の頂部に鳥の羽の装飾をつけた電灯がエジプト蛇腹に残っているといえると述べた個所、あるいはペルシャの家屋について木造から「石造になってもちょうど木と同じような形式を存して」いると述べた個所がある。木造の中でも特に校倉造りのように材を横倒しに積み重ねて造る建築を世界中から実に九種類も説明図に採り上げ、木材に始まった各地の建築が結局石造の建築に進化するという記述の直前にこれを置いたのも、おそらくこうした「校倉造」と組石造を重ねてのことと思われる。ここで暗に示されるのは、当然ながら日本の建築の「材料」が木材から石材ないし鉄材に「一躍」しようとも、当面は「木材時代」の意匠を引き継ぐべし、という主張になろう。

一方「意匠」の解説にあたっては、最近倉方俊輔[20]が〈世界建築図〉と名づけた図が用いられた。もっとも土居義岳の指摘[21]のとおり、この講演は日

---

[20] 倉方（2004）193。

[21] 土居義岳（1991）「磯崎新という日本的自我と世界意識」、『建築文化』1991.10, 101-2。



本とヨーロッパとの接続を目指した旅行の成果であり、全世界の網羅を目指した図ではない。

この図中の文字はすべて、建築様式を示す。右上の「古代系」のフェニキアの円から下、ギリシア・ローマへと「古代系」の円を脱出する矢印が最大のポイントである。ここからロマネスク、ゴシック、ルネサンスを通じ再び戻る「西洋系」の様式の循環運動が始まる。ルネサンスの円からはアール・ヌーヴォーとアメリカの摩天楼が抜け出し、循環からの脱却を図るが、様式としての未確立ゆえか、円は破線である。以上の太い二つの円とは別に「東洋系」という細い円がある。インド系、シナ系、回教系の三つの円内に各様式が地域名で書き込まれ、西洋系のように矢印で示された様式展開は示されない。支那系から外れながら矢印がない破線の円には、日本と記された。

この図の特徴の一つ目は、「西洋系」での循環運動の始まりと終わりにある。伊東はこの循環の中では「クラシック」つまりギリシア・ローマと「ゴート式」を「一つの独立のスタイル」として評価し、ロマネスクやルネサンスについては「少し薄暗いような要領を得ないような」「一進一退のよ

うに見ゆる」「曖昧」などと否定的な評価を下した。岡倉であれば「様式がすべての様式を失う」「偉大な過渡期」を、復古と新しいものの吸収という「二重の問題」に立ち向かうことで乗り切った「イタリア・ルネサンスの推進者」こそ評価する[22]ところである。伊東は彼から見て「百年ほど前」、つまり「ルネッサンス」の「いかにも物足らぬところ」に起因する、次の西洋建築様式展開として「純粋のクラシックを試みる一派」と「純粋ゴート式を試みる一派」という二つのリヴァイヴァル運動が併存した時代を「煩悶」と呼んだ。しかしここで「西洋系」の円内の循環が完結したか逆行したかが伊東の力点ではない。むしろ「この輪廻から出離したいという念」に因る「新乾坤」として、未完の様式ながら「仏国のアール・ヌーヴォーやドイツのセセッション」と、「アメリカの最新のスタイル」として「鉄材を応用し」た摩天楼の名とを挙げた。そもそも、伊東の最大限の評価は「今日の目から見るとよほど調子の違った一種何となく謎のような常識では解釈のできないような」「どことなく粗野で琢磨の巧を尽くしていない、妙な蛮風の」「古代建築」の「世界を脱出して新しい世界を作」り「新生面を開いた」民族、すなわち「ギリシア人」に与えられた[23]のである。この脱出には「少なくとも数百年の星霜を費やして自然に進化し」たことが述べられた。

また二つ目の特徴は、西洋ほど「面白い活動はない」東洋を、インド系、回教系、シナ系の「各団みな別々になって孤立しているよう」で、「各特殊の性質を発揮してそれを互いに守っている」と述べた点である。その意味で、「東洋系」の円は「古代系」の円と同様に運動としての歴史以前のものとすらいえよう。「東洋の大部分は未開国であるから［…］その建築の将来の発展などいう問題は始めから起こりえないところが多い」中で、日本は「西洋系」の円からの脱出と同様に「二千年来蟄居しておった支那系統の一隅から脱化しようとしている最中」とされた。

伊東はこれに続いて様式変遷の「主義」として従来に見られた変遷のあり方を三つに整理したが、ここから〈世界建築図〉への様式名の掲載基準が解る点が第三の特徴である。「進化主義」としては「他の感化も受け」ながら「自分の分別をもって善悪邪正を取捨する」ものとして称賛し、具体例に「希臘建築」を挙げた。「折衷主義」には「芸術の真髄たるオリジナリチー

---

[22] 岡倉（1980a）「日本の覚醒」『岡倉天心全集』平凡社、v.1, 227［*The Awakening of Japan*, NY: 1904］。

[23] 伊東（1909）『建築世界』1910.4, 10。

または純潔」をもたないとし、〈世界建築図〉上に名前を載せていない「インドとクラシックとの折衷なるガンダーラ式」を例に挙げる。日本とギリシアの接続という初期の伊東の論考群において重大な連環を担っていたはずのガンダーラの名が〈世界建築図〉から落ちた点には伊東の議論の展開が見られる。ここに岡倉天心の影響をみることも可能である[24]。すでに伊東はガンダーラ様式を「原則」中の第六・甲「器械的混合」の一例として挙げていたので、「器械的混合」よりも「科学的混合」を評価したことが判る。さて先を続けると、「帰化主義」とは「甲のスタイルが強烈なる乙のスタイルの影響を受けたために、圧制的もしくは任意的に自己のスタイルを捨てて乙のスタイルに帰依する場合」で、「国の滅亡したときあるいは劣等民族が優等民族に心酔したときに起こる現象」として「オスマン人が東ローマを滅ぼしてかえってサンタ・ソフィアの建築を模範として回教寺を作ったこと」を例に挙げた[25]。これも〈世界建築図〉には載せられなかった。「回教系」の円内にある「トルコ」の文字には、わざわざ「セルジュク」と注記されたほどである。「進化主義」なしに〈世界建築図〉へ載せるべき様式は生じないという姿勢が窺われる。

2.4. 日本建築の過去と未来

伊東は日本建築の歴史を「神道時代」「仏教時代」と明治維新以後の「公共建築時代」という三つに大分しただけで「細かい変遷」には触れようとしない。ここには日本内外を含め「宗教建築時代はもはや過ぎ去って」いるという現状認識が作用しただろう。今後の日本建築の様式にとって「脱出」する対象でしかない過去に対する詳細な検討は不要ということだと考えられる。ここに含まれる陥穽については後述する。

---

[24]「ガンダーラ美術はさらに深く、また一層の用意をもって研究してみれば、いわゆるギリシア的な特色よりは中国的な特色の方が一層際立って認められるのだ。[…] アレクサンドル大王の侵入も、ヘレニズム文化というより、むしろペルシア文化の影響を伸長したものである」。岡倉天心（1980b）「東洋の理想――日本美術を中心として」『岡倉天心全集』平凡社、46［—, *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*, London: Murray, 1903］。

[25] 伊東（1909）12。なお続く箇所では「建築のスタイルは突然に発生しないという原則から独創主義」も否認された。但しアール・ヌーヴォーや摩天楼は「まったく無より創造したものでない」。この点は後に1920年の分離派建築会結成に対し反応が「冷たかった」点とも関係しよう。鈴木博之（2003）『伊東忠太を知っていますか』王国社、27。

伊東は日本建築界の「七転八倒の大煩悶」「有史以後希有の暗黒時代」という現況を決定づける要因をいくつか考察した上で、これに対する対策はただ一つ「スタイルの創造」であるとした。しかし「人の力をもってスタイルを作り出すことはできるものでない」。スタイルは「一個人が創造したのではない、[名の残った作家たちは] みな偶然にもその時代の要求を代表した」にすぎない、よって現況の混乱は「時をもって自然に解決せらるべき」とされた[26]。「日本文化の昨今の発展が急激であるのを見て、ヒドク慌てた態度をもって建築界の不振を慷慨し、この際速やかに日本に特殊なるスタイルを定めなければならぬ [...] と絶叫するもの」の多かった当時、伊東が議論の主な対象とした「世説」は「折衷主義と欧化主義」、とくに後者だった。前者に対しては折衷が不可能である点を理由とする「欧化主義者」を駁しながらも「折衷そのものは目的ではない、一種の手段である」として、「主義」とすることを否定した。他方「欧化主義」に対しては次のように口を極めて批判する。

> もし日本国民が自ら進んで欧化主義を唱えるならばそれは日本国民が自殺したものであります [...] 日本は決して西洋を理想的最高最美のものとして崇拝するものではありますまい [...] 永久に西洋の臀についてその模倣に憂き身をやつすことは到底吾人の堪えられないところです[27]

伊東は「太古の原始的の木造建築」が「長い年月の間に [...] 石造のクラシックのスタイルに」なったことに鑑み、日本の木造建築もまたギリシアのような「オルダー」、「一種の完美なる形」に向かうことを期待した。日本の「進化」が漸進的なものか、一躍した破格の進行となるかについても彼は確言しなかった。ここに伊東が〈世界建築図〉上で日本という破線に矢印をつけなかった理由が推測できよう。すなわち「支那系」建築の圏内から脱出しようとする際、進化主義に拠らなければ「日本」の名が消えてしまうが、現状では「大煩悶」にある日本建築が今後どう進行するか、伊東の長期的な視点からは確言できないゆえに、矢印が描けなかったと言える。

付言せねばならないのが、この「支那系」からの脱却は必ずしも建築史家

---

[26] 伊東 (1909)、『建築世界』1910.5, 8。この点も岡倉の議論に共通する。岡倉 (1944) 323。

[27] 伊東 (1909) 8。

の村松伸が言うような「脱亜論」[28]とは言えない部分を抱えていることである。そもそも仏教伝来以降の日本建築を「出藍」と呼びながらも中国から影響を受けたと伊東が認めた点、またそうした伝統からの「進化主義」的な、つまり連続的な様式変化を推奨した点からみて、「支那系」からの脱却は「脱亜」に結びつかない。さらに言うならば、欧化主義への嫌悪からみて、これは「入欧」も意味しない。もっとも、西洋の影響を受けながらも日本の伝統からの連続的な変化を推奨する立場というと容易に「折衷主義」を招来してしまう状況にあって、「スタイルの創造」が時代からの自然な要請として実現されるのを待たねばならないと述べた建築史家・伊東の立場は苦しかっただろう。その後靖国神社神門・明治神宮・朝鮮神宮などの神社建築の復古的とも呼べる設計にも、一橋大学兼松講堂のような全体的に見れば正統的な欧州の様式を採り入れた設計にも、また築地本願寺のようなインド様式の引用にも、さらには震災記念堂のようにバシリカ教会の平面と仏塔や唐破風の立面を「器械的混合」したような設計にまで手を染めた建築家・伊東の素朴とも呼べる立場に比べると、かなり困難なものといわざるをえない。

この困難は、伊東の特に「東洋系」に対する国家ないし民族単位の「スタイル」認識が、スタイルの興亡と国家ないし国民の興亡とを容易に重ね合わせてしまう議論を誘発したからと考えられる。もちろん一度「ギリシア人」のように「新乾坤」を開けば、その後の国家の興亡とは関係なくスタイルを論じることができただろうし、伊東自身も「意匠」に関する様式を本位とする歴史記述においてそれを望んだかのようである。しかし彼は日本建築様式確立の成否と日本国民の興亡を重ねてしまった。「支那系」の圏内からの独立を図ることは、「脱亜」とは呼べないにせよ、日本の固有性の主張を意味したであろう。また先に見たとおり「欧化主義」は日本国民の「自殺」であった。ここには様式の自律的展開を本位とする美術史学的記述と、国民様式の実現を模索する建築家ないし当時の日本建築界に属した者としての立場が交錯しているといえよう。しかしここにも、岡倉の「藝術とは国民的なもので［…］伝統から切り離されてしまえばわれわれは滅びるであろう［…］しかし同時にまた、個性こそが活力の本質であるとも考える」という記述[29]の影響が息づいている。伊東は既存の大円からの脱出にこそ「芸術の真髄た

---

[28] 村松（1993）184。

[29] 岡倉天心（1980c）「「美術院」または日本美術の新しい古派」『岡倉天心全集』平凡社、59［*The Bijutsuin or the New Old School of Japanese Art*, 1904.4］。

るオリジナリチーまたは純潔」を認めていたのだから、ここには個性と国民のオリジナリティとを巡る議論を喚起する要素も含まれていようが、十分な論証にはさらなる材料が必要である。

3. 結語

以上の伊東の議論の中では、循環史的な西洋建築様式史把握がかなり特徴的である。各様式ごとに幼年期・完成期・衰退期を措定するのではなく、様式の名そのもので循環史を構成するというこのアイディアがどんな影響の下で生じたのか、現時点ではまだ判らない。一方岡倉の歴史観についてはかねてから、ヘーゲルの直接ないし間接的な影響下での弁証法的な要素が指摘されており[30]、確かに先の引用に見たとおり「物質的形式」と「精神」の相克から「精神」が解放され「自由」を得るという図式や、「ヨーロッパの学者が好んで過去の芸術の発展を分類するのに用いる三区分は、どうやら精密さに欠けるとはいえ、やはり必然的な真理を含んでいる」として採用され展開される「第一期／第二期／第三期」という三分法などが特徴といえよう。岡倉のように個々の様式の興亡を顧みることのない伊東の議論は、一方では平面上の円環として様式名を配置することになった図式化ゆえの限界といえるし、他方では岡倉が美術に関してすでに準備していた日本の各時代様式を建築に関してあまりに大雑把に捉えながら、そこからの「新乾坤」に期待をかけた態度ゆえともいえる。

両者の差異はどの様式を評価したかという点にも及ぶ。伊東は各地域が「孤立」した「東洋系」と同じく地域名が記されただけの「古代系」の圏内からの「脱出」を成し遂げたギリシアを最大限に評価し、「西洋系」の循環運動からの「脱出」として同じ志を垣間見る「アール・ヌーヴォー」と「アメリカ」を見やりながら、同じ運命が自然に「日本」にもたらされることを当てにした。一方岡倉は「偉大な過渡期」を乗り切った「イタリア・ルネサンス」を「日本の覚醒」に重ね合わせ、復古と革新という「二重の問題」のアウフヘーベンそのものを評価したようである。伊東はこのルネサンスを、循環の矢印をそのまま進むか逆に進むかという「煩悶」と捉えるが、煩悶自

---

[30] 岡倉天心（1980b）83-85。これに言及したものとして、例えば坂部恵（2005）「天心と九鬼周造」『ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会』右文書院、203。

体は評価しなかった。伊東と岡倉を対比させるならば、伊東は古代系同様の停滞のままに止まっている東洋系の円内から脱出し、日本ないし東洋の建築様式の循環を切り開く立場として日本を位置付け、また岡倉はすでに綿々と引き継がれてきた東洋ないし日本の美術様式史の「偉大な過渡期」として同時代を位置づけていたことになる。

さらに伊東の循環史的把握は、〈世界建築図〉にバロック・ロココなどといった西洋の様式名が欠落しており、「西洋系」の中に名を記された四つの様式の選択がかなり恣意的に思われる点にも関係するだろう[31]。日本建築のそれまでの時代展開を「神道時代」と「仏教時代」という二つで片付けたことにも鑑みれば、この講演では「東洋系」の圏内の豊富な地名の数々にも関わらず、またガンダーラやオスマン・トルコといった名の欠落に見られる議論との整合的な選択方針にも関わらず、様式名の網羅は目指されていないように思われる。

また、かねて論者は日本建築界の議論における「意匠」と「材料」の乖離を指摘してきた[32]が、伊東においても一方では価値の階梯ぬきの「材料の進化の順序」があり、他方で「材料」との呼応関係ぬきの「意匠」における西洋建築様式の循環運動や東洋建築様式の非歴史的な並立が構想されている。確かに「木材時代」から「石材時代」を迎えるにあたっての変化と「ギリシア人」の「新乾坤」は確かに重なっているので、そこに「意匠」と「材料」の包括的な議論の可能性があったかもしれない。しかし同じように「新乾坤」に挑んでいるヨーロッパ同時代のうち、少なくとも「アール・ヌーヴォー」は材料の変化を伴っていないので、伊東の議論から直接その可能性を看取るのは拙速であろう。さらに日本建築の今後を構想するにあたっては、その要因に含まれた材料の変化、脱宗教時代の用途の変化、国民の意識の変化がみな折衷主義・欧化主義・進化主義の枠組みに回収されてしまい、「意匠」と「材料」という要素は議論から霞んでしまっている点も指摘でき

---

[31] ここには『建築雑誌』に 1904 年から翌年にかけ連載されたフレッチャー、滋賀重列訳「建築における材料の勢力」(*The Influence of Material on Architecture*, 1897) の影響が見られる。フレッチャーの様式への評価判断は「建築の能事は材料にあるのであって、この材料の正式の用い方が様式なるものを成型する」というものである。橋寺智子、川道麟太郎(1988)「明治期の翻訳記事“建築における材料の勢力”と「建築進化主義」」、日本建築学会大会学術講演梗概集、359-60。

[32] 天内大樹 (2007)「分離派建築会結成の理論的背景——初期日本建築界における「芸術」と「表現」」、『美学』n.228, 70。

る。

以上、伊東の循環史的な西洋建築史把握と静的な東洋建築史把握、さらにその全体的な構図の中での日本建築史の位置付けを、岡倉の弁証法的な日本美術史把握との比較において概観した。様々なレヴェルで伊東が西洋の建築史学の議論や各地の建築そのものを受容し、その上で立論を行った様子を解析したことで、岡倉と伊東の両者の議論に、展開を含んだ影響関係がある点が明らかとなった。その事実をどう位置づけるかは、稿を改めるべき課題であろう。

［本稿は第二回表象文化論学会大会（二〇〇七年七月一日、東京大学駒場キャンパス）での口頭発表「様式を通じた世界との接続――伊東忠太による「日本建築史」――」を加筆修正したものである］